

研究論文

# 宗学論の一考察

——第一回日蓮宗教学研究発表大会を中心に——

古河良啓

## 一、はじめに

本稿は、日蓮宗の宗学論の一考察として、特に昭和二十三年に開催された第一回日蓮宗教学研究発表大会に着目し、大会で発表された宗学論と周辺の関連資料を参照し、当時の宗学論を考察するものである。

今日「宗学」の語は「各宗門の教義をさわめる学問<sup>1</sup>」、「自己の属する宗派の教義の学問<sup>2</sup>」と解説されるが、実はその意味は一般的に理解されている以上に多岐に亘る。例えば日本仏教各宗派の宗学に横断的に触れた『現代仏教を知る大事典<sup>3</sup>』や『日本仏教を問う<sup>4</sup>』では、概して宗学の定義や方法論の異同が示されており、<sup>5</sup>そこには各宗派の特質と歴史に裏付けられた、宗派独自の宗学が存することが知られる。

主題である日蓮宗の「宗学」については、『日蓮宗事典』で次のように解説される。

日蓮聖人の教えを信奉する日蓮宗では、聖人の教えを宗義として尊重し、宗義の研究を日蓮宗学、日蓮教学と称している。(一)宗学という用語はおそらく近代に入って仏教学研究が盛んになったため、それに対応するかた

ちで出来上ったものである。大正末期ないし昭和初期に宗学という用語が頻繁に用いられる以前は「余乗」に對して「宗乗」と称していたもの<sup>6</sup>のようである。

右の解説に続いて『事典』では、複数の諸先師による宗学の見解が列記され、宗学の本質や意義、対象や目的、研究方法等について多様に論じられてきたことが分かる。

そこで、「日蓮宗の宗学論」という視点から先行研究を頼りに少しく見てきたように、先師は自己の主體的な信仰を時代の中で論理化し、学的に位置付け、主体性を保ちながら客観的に表明するかということ<sup>8</sup>を課題としていたことが推察されるのである。こうした諸先師の宗学追求の姿勢を考察し、時代の問題意識や論点を踏まえることは、現代に仏祖と宗祖の教えをいかに領受し、時代の進展に応じて社会と人々にいかにアプローチしていくのかを考える上で指針となるものと思われる。

かかる問題意識のもと本稿では、特に昭和二十三年に開催された第一回日蓮宗教学研究発表大会における宗学論に視点を定めたい。第一回教学研究大会では八名もの諸氏により宗学論の発表が行われており、大会の中では宗学をテーマとした討論会も行われている。まさに宗学が注目された大会であり、周辺の関連資料も参照しながら、終戦間もない当時の宗学論の視座や論点を考察していきたい。

## 二、日蓮宗教学研究発表大会

### 1 日蓮宗教学研究発表大会

日蓮宗教学研究発表大会（以下、教学大会）は、年に一度開催される日蓮宗の学術研究発表の場である。日蓮宗務院・身延山大学・立正大学の三者が輪番で会場と運営を持ち回り、昭和二十三年に第一回大会が開催されて以来、

令和三年で七十三回を数える。<sup>10</sup> 大会は例年二日間かけて行われ、大学教員や大学院生をはじめ、関係研究所の研究者、僧侶、有志により、日蓮教学・教学史・教団史、仏教学・仏教文化を中心として多岐に亘る研究発表が行われる。

## 2 昭和二十三年「第一回教学大会」

本稿で着目する第一回日蓮宗教学研究発表大会は、宗務当局と祖山学院（現・身延山大学）、立正大学の三者合同主催の下、左記の大会要項の通り、昭和二十三年十一月五日・六日に立正大学を会場に開催された。当時の立正大学は、昭和二十年五月の空襲で大学本館・図書館・中学本館の三棟を除いて総てを焼失しており、教学大会の開催された昭和二十三年三月によく木造第一別館が竣工し、まさに戦後復旧のさ中であった。<sup>11</sup>

### 日蓮宗教学研究発表大会要項

一、日 時 昭和二十三年十一月五、六両日

一、会 場 立正大学（十一番教室）

一、研究題目 日蓮宗の教学布教に資すべき學術研究であれば範囲を限定しない

一、発表者 全国宗内の学者及有志諸師（約二十名）

一、発表要綱 一人二十分（時間厳守）

五日、午前九時より午後三時まで

六日、午前九時より正午まで、尚午後一時―三時討論会

一、討論題目 「宗学の将来について」

この第一回大会は、大会の翌年に発行された『日蓮宗教学研究大会紀要 第一集』<sup>12</sup>（以下、「紀要」）に大会要項や発表要旨、大会協議事項などがまとめられている。<sup>13</sup> 本節では『紀要』を頼りに、開催の経緯と研究大会の発表者を確認していききたい。

① 開催の経緯

『紀要』の冒頭には、大会の会長を務めた立正大学第十四代学長の望月歆厚氏による「日蓮宗教学研究発表大会に際して」と題した挨拶文が掲載されており、開催に至る経緯と大会の趣旨が述べられている。

本年三月の身延山に於ける日蓮宗宗会の折教学部長の稲葉君と立正大学の宗学研究所の本年度の仕事について意見を交換した時が事の発端であると記憶する。（中略）時代的欲求等から全宗門同好の士に呼びかけ大に学的雰囲気を作り上げ宗門の時代化と我々の品性高上に資そう等の話合をし宗務当局と祖山学院、立正大学の三者の合同主唱の下に教学研究大会を開催しようということになり（後略）<sup>14</sup>

右によれば、教学大会は昭和二十三年三月の日蓮宗宗会における教学部長との意見交換を発端としてわずか八ヶ月後に大会が開催されており、非常に短期間で準備されたことが分かる。

続いて望月氏は挨拶の中で、教学大会が要請された理由として「外的刺激」と「内面的事情」の二つを挙げている。外的刺激は「昨年来浄土宗が東西両京に於て教学研究会を開催したとか其他の宗門及大学の此等の事業に刺激された」こと、しかしその根本には「日本国の国家状況及び安易的な客観諸条件が宗門の信仰並に教学の面に幾多の衝撃を与えたことはいなみ得ない事実」であったことを明かしている。

ところが、「併し私が茲に高調したい点は、本宗信仰と教学の内面的事情にある」と述べ、そうした外部からの諸要因に比してなお根本的な問題が宗門内に内在するとして、具体的には「知性の貧困から来る批判の欠乏」<sup>15</sup>と「信仰上に反省の謙虚さを失った」<sup>16</sup>ことを挙げ、「現今の我宗教界の現状ではあるまいか」と指摘する。そして「我等は理性に訴え、信仰の本質である謙虚な反省を加えて新時代に対蹠しなければならぬ」として、これらをして大会開催の一趣旨であることを表明している。

## ② 第一回教学大会の発表者

以上の経緯を踏まえて開催された教学大会は、両日ともに多くの聴講来会者があったようである。研究発表についても予想以上の参加希望者があったため、『紀要』の後書きによれば立正大学の関係者は当日の発表を遠慮することとなり、『紀要』における誌上参加となったことが記されている。

第一回教学大会の発表者は次の通りである（※は誌上参加）。

### 発表者氏名及論題<sup>17</sup>

日蓮聖人註法華經本文攷

兜木正亨（※）

唱題即成と唱題往生の二大思潮の研究

鴨宮英迅

五綱に就ての一考察

小林是恭

ルーテルにおける信仰と自由

佐藤智雄（※）

法華経行法史上より観たる観心本尊抄

塩田義遜

戦後に於ける宗教政策の転回

鹿内芳衛

宗教の領域と宗学の課題

フイヒテの宗教論

本尊戒壇相関造営私案

根本仏教と法華経

日蓮大聖人御花押研究

日蓮宗学の現代的徹底単純化と人間礼拝

儒家の非仏教論

靈山往詣の信仰に就て

靈山浄土に就て

新時代の法門綱格

周武廢佛原因小考

現代宗学の課題

法華経に於ける総合統一思想の開顕

天台四門観の研究

本宗教学の基本たる四句四門と弁証法

南部実長の甲州における所領に就いて

宗学私見

流通門より観たる日蓮教学

日蓮宗学の主体性

① 執行海秀（※）

菅谷正貫

鈴木一成

高木國男

竹田日濶

② 綱脇龍妙

③ 戸田浩暁（※）

都守泰一

長井辨順

④ 中野文隆

野村耀昌（※）

⑤ 長谷川正徳

細井友晋

松平任弘

松野顕佑

宮崎英修（※）

⑥ 茂田井教亨

森川博祐

⑦ 安永辨哲（※）

江戸末期に於ける日蓮宗特有の五成語に就いて

山上、泉（※）

唱題三昧の自受法楽と行学二道の振興

湯川日淳

宗学の組織について

⑧ 渡邊日宣

第一回大会の発表を概観すると、大学関係者をはじめとして、救癩活動に尽力した綱脇龍妙氏や唱題行を組織体系化した湯川日淳氏など広く宗門の有識者が参加し、日蓮教学や仏教学を中心に、宗教学、哲学、社会学など多方面に亘る発表が行われていることが分かる。

そうした中で、宗学については右記一覧の①から⑧の八名の諸師により発表が行われている。誌上参加を含むとはいえ、全二十八名の発表中八名もの諸氏が宗学に関しての発表であることは第一回大会の大きな特徴といえよう。さらに先の大会要項にある通り、大会の二日目には「宗学の将来について」と題した討論会<sup>18</sup>が行われており、渡辺宝陽氏が「この大会全体に宗学論の問題が検討される気運があったのではなからうか」と述べているように、宗学にかけられる期待や関心の高さを伺うことができる。<sup>20</sup>

## 二、宗学論の発表

本節では、第一回教学大会における八名の諸氏による宗学論の発表を概観し、いかなる視点から宗学が論じられたのか確認していきたい。

### ① 執行海秀「宗教の領域と宗学の課題」

執行海秀氏は、仏教における「知と信」「理佛と事佛」「内在と超越」の問題を宗祖はいかに解決されたのか、それ

を宗教の領域において確立するのが宗学の課題であるとしている。

執行氏は、人間思想の発達は、外面的には宗教的信より哲学的思索へ、哲学的思索より科学的知性へと展開し、内面的にはその逆に、「科学的知性の極まるところ哲学的思索へ進み、哲学的思索の極まるところ更に宗教的信へと展開されるものではなからうか」と述べ、「知性に依って解明する科学の領域」「思索に依って合理化される哲学の領域」「信に依って決定される宗教の領域」として、各々は領域を異にするものと見る。

「人間生活の凡てが、科学的知性によって解明され得るものではなからう」と見る執行氏は、仏教は知性的な立場から無神論を標榜し、科学的哲学的宗教であると自認する傾きがあり、「真の宗教としての存在意義があるであらうか」と疑問を呈す。すなわち小乗仏教は「知性を重んじ、凡てを科学的に解明せんとしたいわば一種の科学的仏教」であり、対して「仏教を哲学化し、倫理化せんとした（中略）人間本来の感情を否定することなく、煩惱の存在をも肯定して、これを統御する規範」を見出したものが大乘仏教であるとする。

しかし、倫理的、哲学的仏教によっても、「苦悩の底に沈輪せる者を救ふ」という人間の宗教的欲求を充たすことができず、ここに仏教の宗教化が要請され、それに応じたのが浄土教であるという。執行氏は、自覚教とそれに立脚した聖道門は、「自己の知性に依って照された倫理的規範の道に外ならない」のであり、「信仰を生命とする真の宗教」とはなり得ないと論じる。例えば信仰の対象として本尊を立てても、それは「自己の倫理的理想境」の具象化した理佛であり、自己を超越した「客観的な事佛ではない」という。

対して「従来の倫理的、哲学的仏教より脱した救済教としての浄土教」は、他力本願の絶対信を強調し、「知性の灼熱に依って枯涸せんとした仏教」は、「弥陀本願の慈雨に依って宗教としての生命をとりかえした」と見る一方で、それは「知性を否定し、自我を否定した彼方に宗教の領域を求めようとした」ものであると評す。

そこで、「聖道門の流を汲みながらも、浄土門の洗礼を歴た日蓮聖人」は、仏教における「知と信」「理佛と事佛」「内在と超越」の問題をいかに解決されたのか、この問題こそ聖人の教学の核心であり、宗学上の課題であると述べ、この課題は宗教の領域で確立する必要がある、そうでなければ宗教の領域は科学や哲学に摂取されて「存在意義が認められないであろう」と結ぶ。

## ② 綱脇龍妙「日蓮宗学の現代的徹底単純化と人間礼拝」

綱脇龍妙氏は、仏教も法華経も宗祖の教えも時代の中に動的であり、戦後の非常時に国家人類を救済するためには、法華経の三大眼目が含蔵された御題目によるべきであるとし、時代状況を見すえ、宗義の徹底と単純化を提唱している。

綱脇氏は「仏教は動的の宗教で、時代に依ってその姿を変化して活躍し大に人類を教化利益している。仏教經典の精髓である法華経が、大に動的で正像末の三時にそれぞれ姿を異にして活躍したことは当然である」として、日蓮聖人の教義は、その根本は「無論動かすべきものではない」としつつも、鎮静した一定不変のものではなく、時代の変化に依り、「変化するように仕組まれていると思う」と述べ、それは五綱判と三秘であるという。

「いつの時代でも徹底せぬものは役に立たぬ」「徹底したものは単純である」として、「非常な急調の現時」において宗旨の本尊論や安心、信仰などが「複雑難解」であつては、「宗門が国家人類を救うなどは夢にも期せられず、宗旨の存在さえが疑われる」と指摘する。

そこで日蓮聖人の教義を現代的に徹底するには、教義と法華経に徹底して取り組む必要があるとし、二乗作仏・久遠実成・因行果徳が法華経の三大眼目であり、それは「南無妙法蓮華経の七字の御題目」に「含蔵」され、それによ

つて「此の日本の、此の人類の大難局を救済」する「今正しくその時である」と述べている。

時代の大変化によって、「本化上行としての日蓮聖人よりも、不軽色読人間礼拝の日蓮聖人の方が、重大の意義を有つことになる」と述べ、人間礼拝の徹底こそが「今後の宗教としての価値を決める」と結んでいる。

③ 戸田浩曉「儒家の非仏教論—宗学の自己反省のために—」

戸田浩曉氏は、宗学は新しい時代の要求に応じ、人々に資する指導倫理を樹立するべきであるとして、儒教と対比しながら具体的に提言している。

戸田氏は、学としての正当性を主張しようとするならば、第三者や論者の批評を自己反省の資とすべきであり、宗学が新しい時代に対処し、時代の要求に応じてゆくために大切な態度であると述べる。

そこで儒教の排仏論にも一顧の価値があるとし、（仏教は出家によって）「三綱五常を廢し、倫理道德を破壊する」とした、儒教の排仏論を例示する。ところが、「肉食妻帯勝手たる」以降の僧侶はもはや出家ではなく、儒教の排仏論は「今や的無き矢」に過ぎないとしつつも、では、新しい時代の人々に向けた仏教的な道德や生活態度が確立されているのかと疑問を呈す。戸田氏が問題としたのは、「近代資本主義生産機構の下に、好むと好まざるとにかかわらず」仏教徒の生活形式が他教徒の様式とその差異が縮小する中で、「仏教は又宗学は果してこの現実に目を開いて教義上の反省を試みているであろうか」ということである。

現実の仏教は時代の進運に並行せず「教歩遅れている」と指摘する戸田氏は、「道德は変化しても亡びることはない」とした上で、仏教が世界的宗教たらしめるかは、道德の上に立つ仏教独自の新しい指導的倫理の樹立が必要ではないかと述べ、「このことは直に宗学に向かつても尚言えるであろう」とする。儒家が仏教の欠陥を「倫理道德」の

面から指摘したことは、情勢の変化した今日においても、仏教・宗学の自己批判に一つの方向性を示していると結ぶ。

④ 中野文隆「新時代の法門綱格―教相主義より観心主義への論証―」

中野文隆氏は、時代に応じた法門の綱格が教相主義ではなく観心主義に依るべきことを、五段に分けて提唱している。

(1) 日蓮聖人の教学は「歴史的発展の最終的段階に到達した究竟の法門綱格」として信じられてきたが「今日多少反省を要する時代となった」と述べ、聖人の教学は本迹判に根拠が置かれるが、法門の立場は依然として教相主義としてのみ理解されているとする。

(2) 今日歴史的現実を基盤とする批判主義の時代であり、科学的主義に培われた現代人には、「教相主義」では肯首を得にくく、「観心主義」に置き換えねばならないと主張する。

(3) 『開目抄』の五重相對の第五教觀相對判こそ、「今後の法門綱格となるべき教觀判であると思われる」と述べ、「文証の如何に拘わらず現実本位の經驗主義」がこうした解釈を今日要求してくるとして、「教相主義に対する観心主義」の立場を提示する。

(4) 「歴史的研究が教権主義の地盤を全く失墜せしめた今日の如き時代」には、「教権の立場」としての教相主義を離れて仏法そのものの真理性を「簡明直裁」に把握すべき観心主義の立場が想起されるとする。観心主義とは、

「一切の前提を抜きにした体験本意の現象主義」であり、文証主義の教権の立場に対蹠するものと位置付けている。

(5) 日蓮聖人が「余経も法華経も詮なき事」とし、「只南無妙法蓮華経なり」と言われた「教観一具の妙法五字」は、「本迹判的教相主義の立場」で「全貌を公開し得ないと思われる」からであると述べ、「仏法世法を共に絶対妙の立場で究竟的に開顕」するのは「教観判的観心主義の法門綱格」であり、これによる以外、「今後の教学が時代即応のものとして展開すべき進路」は「全く閉ざされている」と結ぶ。<sup>23</sup>

⑤ 長谷川正徳「現代宗学の課題―方法についての一私見―」

長谷川正徳氏は宗学の方法論について論じている。宗学は宗教主観の客観的表現であるから、現代においては訓詁学的方法論を脱し、今日の時代精神である実証的、合理的、批判的、客観的方法に依るべきであるとする。

長谷川氏は、今日の宗学の方法は、文字章句の観念的解釈と恣意的会通操作に依っており、主観的護教的でその帰結はドグマであると指摘する。

宗学とは「信仰体験の論理的表現でありその説明的原理」「宗教主観の客観的表現」とする長谷川氏は、訓詁宗学のもつ論理表現は優陀那日輝の徳川時代より少しも変わらず、宗教や信仰の体験境地は時代を超えるものがあることを認めつつも、その表現は時代的に為されなければ説明の論理として役に立たないと指摘する。訓詁的演釈的方法による既成宗学の内容は、「客観に於いて理論と実践をもつ」現代人の歴史的具体的実践とは関わりがなくなってしまうと論じる。

伝統の方向に純化し、現実への方向を排除した宗学が導き出したものが、教団の現実遊離、教界の現実への作用欠如であるとし、学と教団の現実遊離が現実への無批判的な妥協追隨の一因となり、そうしたことから「戦時中垂流連門教学が如何なるものと結びあひ、教団がいかなる方面に追隨したか」と戦中を省みている。

そこで、宗学が現代人にとって、力ある魅力をもった宗教論理であるためには、方法における「コペルニクスの転回」が必要であり、「論師人師の論釈記述とその演算的發展のみが問題であるという方法と性格」を脱して、「時代精神である実証的、合理的、批判的、客観的方法による具体的人間実存とその歴史的社会的実践とに関わらしめ」なければならぬと主張する。

「訓詁宗学の立場でもって唯物弁証法との対決が果たして可能であるか」「観念宗学の論理で実存主義哲学との対決が出来るや否や」と投げかけ、さらに「資本主義か社会主義か」「デモクラシーかボルシェビキか」という現実の問題について「解釈宗学」が態度決定の一示唆を提示しているのかと疑問を呈し、これらとの対決自体が「宗学や信仰の正否を決定する第一義的な課題」であると指摘している。

#### ⑥ 茂田井教亨「宗学私見」

茂田井教亨氏は、宗学は相対的な対象論理ではなく、宗祖の宗教体験に基づく自己の主體的な信仰体験を対象とした理論的な反省と客観表現であると論じる。

茂田井氏は「宗学については一個のディレッタントに過ぎないものであるが」と前置き、一宗門に属する者が自己の宗学を持たないことほど「存在意義のないことはないであろう」「宗学とは何であるか」という問いに答えられれば、宗門人としての自覚を有ったものである」と述べた上で、「宗学に対する反省」として次のことを指摘する。

「一宗の宗学である以上、祖聖の宗教体験から逸脱したものであつてはならない」

「『宗学』といわれる限り、体系化されていなければならぬ」

「宗教体験の理論的反省がなければならぬ」

「祖聖の宗教体験的内容を、祖聖の著述によつて体系的にわれわれの理解認識の対象に有つ、こういう所に『根本宗学』とも呼ばるべき宗学の一つの範疇がある」

「祖聖の体験に共感し同心し得る者のみが、祖聖の門流としての資格を有つ」

ところが宗教的体験は、祖聖と我々は同一線上に立ち得ても、その「反省、思惟、感受等」は時代的制約によつて必ずしも同一ではないことを指摘し、だからこそ「過去の伝統を絶対の現在に於て有つわれわれの信仰体験の事実の理論的反省」が、「過去と未来とを同時的に有つ」現代の宗学の依つて立つ基盤であると述べる。

その「反省へと進むことによつて到達される認識」は「観念的存在」を対象とするのではなく自己の「体験内容」を対象とし、「体験の自己理解」という意義を保たねばならないと注意を促す。従来宗学はこの点が欠けていたこと、各宗の教学が論理的に精密で整合的になつていく半面、信仰そのものが現実から遊離していったことを挙げ、「充分反省しなければならぬ点であろう」としている。自己の信仰体験を伴わない教学は、いかに精密であれ現実と関係を持った生きた存在ではないとの批判である。

茂田井氏は、「世人はよく宗教と科学との矛盾を避けようとしたり、科学的に解明されない宗教は学問的には成立しないとか考える」ようであるが、これは「甚だしい思い違いである」と述べ、宗学は「形式論理や対象論理、または同一論理的」ではなく、「信仰の論理」に外ならないと論じる。その信仰の論理は、哲学者西田幾多郎（一八七〇～一九四五）の提唱する「逆対応の論理」にあるという。

そこで宗学は「宗学としてある以上、単なる信仰的主張、感情的言動であってはならない」と誠め、常に「ロゴス」としての立場を保持することを提唱し、信仰体験としての「眞実信樂」の世界を持つとともに、論理的立場で理論的反省と客観表現をするところに明日の宗学が樹立されるであろうと述べている。

### ⑦ 安永辨哲「日蓮宗学の主体性」

安永辨哲氏は「日蓮宗の宗学」としての主体性と特質を検討している。

安永氏は、仏教は「知解と信行」「理性と信仰」「哲学と宗教」など、「有限と無限」「相對と絶対」なるものとの対立を内部に包摂するところに理性的宗教の特色があるとし、この「宗教的絶対性と理性的批判性」は仏教研究における「立場と方法」を自ら規定するもので、その特質は宗学も具備すると述べる。

そこで、宗学が「特定の宗教教団」の「解釈学」「規範学」「発展学」であり、「宗祖の思想信念に一如せんとする意欲を基盤とする学的体系」である限り、軽々に「宗祖を超え」ようとしたり、「祖師を否定しよう」とするならば、それは新たな宗教の開創であり、「その宗の宗学ではあり得まい」と述べる。

かかる意味から安永氏は宗学の主体性について、日蓮学を一つの建物に譬え、五項目から検討している。

- (一) 「依って立つところの基盤」(日蓮教学としての基盤)：外相承と内相承、法華経への帰信と本門仏教の開宣
- (二) 「構築素材としての基体」：広く仏教各宗の教学内容が包括されること、特に天台の教判
- (三) 「建築様式」(日蓮学としての構成形態)：五義の教判
- (四) 「内部構造」：三大秘法
- (五) 「生活環境としての使用価値」：一秘、五字七字の受持成仏

⑧ 渡邊日宣「宗学の組織について」

渡邊日宣氏は宗学の組織を提示している。

渡邊氏は、宗学の組織は、受け入れる相手によって異なる形式を取るものとし、専門（出家用）・一般仏教用・知識階級用・檀信徒（在家）用の四つに分類し、各々に組織される綱目を列記している。

①「専門用」は、二分法・三分法・四分法・五分法にそれぞれ細分される。二分法は教相・観心、三分法は教判・教理・三秘、四分法は教判・教理・宗旨・信行、五分法は教判・教理・宗教・信行・安心であるとし、五分法以上も数限りなく発展するであろうが、宗学の形式的組織としては、これらの組み合わせを以てすることが「最も整備されたもののように思われる」と述べている。

②「一般仏教用」は、三分法は仏・法・僧、四分法は信・解・行・証、③「知識階級用」は、宗学を哲学的宗教的に取扱うということ、教学的基础・哲学的根柢・宗教的理想・理想の実現を挙げる。④「在家用」は、日蓮聖人・法華経・題目の三組織としている。

以上、第一回教学大会における宗学論の発表を概観してきた。

学者や大学関係者のみならず、日蓮宗教師が各々の立場から宗学を論じており、宗学の内容や目的、方法論、宗学の組織のあり方を問うものなど、その論点は多岐に亘る。

執行氏や茂田井氏は、仏教徒としての主体的な「信」「信仰」に基づく宗学の果たすべき課題を論じたものと理解でき、宗学の意義と本質についてより踏み込んだ印象を受ける。網脇氏と戸田氏は、時代状況に応じた指導倫理としての役割を宗学が持つようにと提言している。中野氏が主張する教相主義から観心主義への置換は、合理的実証主義

の科学精神の時代だからこそ、文献主義を離れて体験を本意とすることを大胆に主張したものと思われる。長谷川氏も宗学の表現と方法の時代化を主張し、社会と関わり諸問題に応じるべきであることを強く論じている。安永氏と渡邊氏は日蓮宗の宗学としての視点から、安永氏はその特質を掲出し、渡邊氏は日蓮宗宗学が具える分野と組織を勘案している。

このように、第一回教学大会で発表された宗学論では、宗学を単に「宗派の教義を学ぶこと」という固定化した意味で用いてはおらず、諸氏により多彩な捉え方がなされている。

そこで重視されることは、「戦後」や「現代」というように常に「時代」を念頭に置き、その時代に生きる人々や社会に対していかに宗学が関わるかという視点から宗学を論じていることであろう。網脇氏や戸田氏をはじめ、特に中野氏や長谷川氏は時代と人々を強く意識し、伝統宗学の方法論と表現の時代化を主張しているのである。そうした捉え方の一方で、自己の宗祖の理解、信仰体験の学としての宗学を論じているのは茂田井氏である。すなわち、同じ宗学論といえども、「人々に向けて宗祖の教えをいかにアプローチし、導くか」という視点と「宗祖をいかに領受するか」という視点があり、こうした視座の異同は一概には言えないが、諸氏が身を置く環境や立場にも左右されるものと思われる。

もう一つ注目されることは、執行氏が仏教史上における日蓮聖人の思想と立場に立脚し、「日蓮宗の宗学」としての課題を論じるのに対し、茂田井氏は各宗派固有の宗学ではなく、広く「仏教諸宗に共通する宗学」という視点で論じているように見受けられる点である。このような「宗派の学としての宗学」と「仏教諸宗の学としての宗学」という両面的なアプローチがなされる点に、宗学という語の意味の広さと複雑さを看取できる。

こうした諸氏の発表に対していかなる反響があったのか。また発表後に行われた討論会では宗学についてどのような議論が交わされたのか。次節では『紀要』に収録される発表への講評や討論会などの関連資料を参照し、広く第一

回大会当時の宗学論を検討していきたい。

## 四、第一回教学大会の周辺

本節ではまず『紀要』に掲載された大会発表への講評と、大会二日目に行われた討論会の記録を参照し、それらを踏まえて第一回大会当時の宗学論の論点を考察していきたい。

### 1 第一回教学大会の周辺

#### ① 宗学論の発表に対する講評

『紀要』に掲載された「大会協議事項概要報告」には、各発表に対しての望月歛厚氏による講評が活字化されている。望月氏は大会中の発表について、「靈山往詣」「行」「宗学論」というように、内容毎に分類して所感を述べており、宗学の発表については次のように講評している。

更に、他の一群に宗学論があった。茂田井、長谷川、中野等の諸氏であるが、中野、長谷川氏あたりの宗学に対しての批判に於いて宗祖をこえるとする意識を持ったところには宗学は既にあり得ないのであって、宗学は宗祖と一致すると考えるときその存在が認められるのである。<sup>25</sup>

この望月氏の講評は、大会中に諸師が発表した宗学の方法論や表現、組織や体系への個々の言及ではなく、宗学に取り組む者の姿勢を指摘したものと理解できる。そこに見られる「宗祖をこえる」という指摘は、安永氏の発表の中でも同様の表現があるが、これは「宗学する者」の根本的な立場、宗祖に倣う者として「宗祖に一致する」という宗

学の根本を外してはならないということと推察される。

「宗祖をこえる」については、拙稿「望月歎厚氏の『宗学論』の一考察<sup>27</sup>」で触れたように、大会の半年後に立正大学で行われた座談会「宗学の現代的課題<sup>28</sup>」にて論点の一つとして取り上げられている。<sup>29</sup> 教学大会の会長を務めた望月氏を中心に、兜木氏や久保田氏、茂田井氏が参加した座談会では、若い宗門人の一つの傾向として「いつか問題になった宗祖を超えた宗学<sup>30</sup>」「日蓮を超えた宗学」が挙げられる。それは「宗祖の枠に縛られた宗学を伝統的に縛られた学問の枠の中で出来て居る伝統宗学としてこれを打破」しようとするもので、「伝統を無視して直ちに自分の方法論を法華経と御遺文に結びつけ」ていくものであると指摘されている。

これに対して望月氏は「宗学の建て方や説明の仕方はめいめい異なってもよいが間違つてはならないことは、究極に於いて宗祖に帰一するという信仰に於いて一致する」と宗学のあり方を説き、「宗学の型を示す、つまり教相の枠を離れないで日蓮聖人と一致しつつ説明の仕方について異なつて行けばよい」「教相という枠を変えないで、内容の説明に於て、宗祖に一如しつつ説明して行けばよい」として宗学の現代的表現を示すのである。詮ずるところ「宗祖を超えた宗学」とは、「宗祖の教えを私に判断して、取捨したり、優劣をつけたり、別の意義を立てること」と言えようか。宗学は自己が宗祖に向き合い、自己の主體的な信仰に基づくものであり、その根本は宗祖の教えに一如する、一致することであると望月氏は説いているのである。

## ② 討論会「宗学の将来について」

本稿第二節で述べたように、大会の二日目には「宗学の将来について」と題した討論会が行われている。午後一時から四時まで三時間に及ぶ討論会の内容は『紀要』に短くまとめられ、司会者と参加者の発言が対話形式で簡潔に活字化されている。<sup>31</sup> なお、『紀要』では発言者の氏名は姓のみ表記されている。

宗学についての論点は大きく分けて次の二点である。

(一) 現代宗学のあり方

(二) 宗学の表現

(一) に関しては、坂本氏<sup>32</sup>が、現代宗学の成立には日蓮宗の立場にのみ立脚するのではなく、一般の宗教学とも共に同して研究することが必要であることを提唱し、これに対して湯川氏は、宗祖が『開目抄』において学問を統合したことを例に挙げ、「あらゆる学問が統合されることよって現代宗学が構成される」と賛同し、「別々の学であれば宗学は大成されない」として諸学問の統合に宗学の現代化を見ている。鴨宮氏も「宗祖は共同研究的な広い立場で教学をうちたてられたから、現代化すれば現代人にはただちに受入れられるだろう」と述べ、二者に同意している。

(二) については、「従来の形式主義より内容主義でなければならぬ」とした中野氏が提起する、「宗学の表現における教相と観心」が論点となる。「観心は体験主義である。妙法蓮華経が自分で体験できなければ人を導くことはできない。この体験に内容の本質がある」「観心の立場に立つて教相を批判する。教相を超えることに重点がある」とした同氏の発言について、鴨宮氏は「教相を飛躍して観心に行けば邪義となる」と述べて、「教相を中心」とすべきであると主張する。茂田井氏は「教相を超えるということは聖人の信仰ではなくなることではないか」と疑問を呈し、これについて中野氏は「宗祖を超えることは結局自己批判になる」と応じている。さらに同氏は、教相は具体的な表現の一つであり、その表現は時代とともに変わるべきであると述べ、米田氏は「教相の表現を現代化してゆくべきである」と部分的に同意している。

この他、討論会では、「現在における折伏の可否」「本尊の形式の問題」「南無妙法蓮華経か南無釈迦牟尼仏か」などについて議論が交わされている。

## 2 第一回教学大会当時の宗学論

これまで第一回日蓮宗教学研究発表大会における宗学論について、各氏の宗学論の内容を確認し、関連資料を参照しながら、宗学がいかに考えられ、論じられてきたかを概観してきた。

第一回教学大会は、望月氏の開催趣旨に述べられるように、戦後復興の中で学的雰囲気醸成とともに日蓮宗宗門の信仰と教学を立て直し、宗門の時代化を資すことを目的として開催された。綱脇氏が「非常な急調の現時」と表わし、長谷川氏が「資本主義か社会主義か、デモクラシーかボルシェビキか我々にとつてギリギリの課題になって迫っている」と述べているように、激動の戦後社会にあつては、今日以上に日蓮宗宗門の信仰と教団のあり方が問われたことは想像に難くない。大会における宗学論や討論会では多くの諸氏が時代を念頭に、いかに社会と人々と交渉を持つかという視点から宗学を論じていることを伺うことができた。それは終戦から間もない時代状況だからこそ、信仰の学としての宗学とともに、宗門と時代を牽引する新たな基軸として宗学が捉えられ、その可能性が期待されたからではないかと考えられる。

伝統宗学の方法論や表現の時代化が主張され、宗学の現代化が求められる流れの中で、中野氏の提唱する「教相と観心」の問題や「宗祖を超える」と称された傾向が論点となり、大会中の討論会やその後の座談会で議論が交わされている。後世から見た「宗学論の展開」という視点からすれば、そのやり取りを通じて「宗祖に帰一、一致する」という望月氏が示す宗学の根幹がより浮き彫りになったともいえるであろう。殊に「宗祖を超える」については、仏祖を領受した宗祖の信仰と教えの枠から自ら外れることであり、それは宗学の方法論や表現を変えろという表層的なことではなく、仏祖↓宗祖↓自己の系譜からの逸脱を意味することと理解できる。

ところで、日蓮宗の宗学論において他者の宗学論への批評が活字として残る例は少なく、本節で参照した講評、討論会、座談会の三つの文章は、他者の宗学論へのその時点における生の批評を伺える数少ない貴重な資料と言える。

## 五、むすび

昭和二十三年の第一回教学大会は、学者や有識者のみならず多くの諸氏により闊達に宗学論が交わされた。それは、戦後三年の激動の時代の中で各氏が捉える宗学観や宗学の課題であるとともに、各々が時代の中で感得した仏弟子としての信仰と理念の社会への表明とも受けとめることができ、日蓮聖人の教えのもとに戦後の荒廃した日本社会を担うという気概を感じる、熱意に満ちた宗学論であった。そこに看取される「教えと信仰に基づいて、それを社会に実践し、現実を切り拓いていく」という精神は、当たり前と感じていた生活環境が激変し、価値観や死生観、社会通念が刻一刻と変化していく今日だからこそ、受継いでいくべきものであると言えよう。

時代背景や社会、教団の動向にも目を配りながら引き続き諸先師の宗学論とその展開を考察し、教えと信仰のもと人々に寄りそう僧侶のあり方を考えていきたい。

### 【別表】「近代における諸先師の宗学論」

著者	題名	所収	刊行年月日
高田 恵忍	先づ聖祖を研究せよ	『大崎学報』創刊号	明治三十七（一九〇四）年十二月
高田 恵忍	如何にして宗乗を研究せん乎	『大崎学報』第五号	明治三十九（一九〇六）年十月
北尾 日大	『日蓮主義大観』（聖教社）		大正十（一九二二）年四月
高田 恵忍	学問の規範	『棲神』第十号	大正十（一九二二）年七月
北尾 日大	宗学及宗門教育の原理	『大崎学報』第六十一号	大正十（一九二二）年十月

著者	題名	所収	刊行年月日
北尾 日大	『本化宗学綱要』 (平楽寺書店)		大正十一(一九二二)年四月
北尾 日大	信仰と研究	『大崎学報』第七十号	大正十五(一九二六)年十二月
宮崎浅次郎	宗教に於ける批判原理 — 教学者及信仰家の批評立場 —	『大崎学報』第七十号	大正十五(一九二六)年十二月
浅井 要麟	祖書鑽仰の先決条件(上) — 専門宗学者の任務 —	『法華』第十八卷十号	昭和六(一九三二)年十月
浅井 要麟	祖書鑽仰の先決条件(下) — 専門宗学者の任務 —	『法華』第十八卷十二号	昭和六(一九三二)年十二月
高田 恵忍	宗学鉤玄	『大崎学報』第七十九号 ／『日蓮聖人新研究』 (立正大学文芸部)	昭和六(一九三二)年十二月・ 昭和七(一九三三)年三月
山川 智応	宗学に於ける現在の諸潮流と 吾等の態度	『大崎学報』第八十号	昭和七(一九三三)年二月
遠藤 是妙	宗学の淵源	『棲神』第二十号	昭和十(一九三五)年一月
室住 一妙	日蓮宗学新指針	『棲神』第二十号	昭和十(一九三五)年一月
真野 正順	宗学組織論	『大崎学報』第八十六号	昭和十(一九三五)年七月
中澤 要實	宗学への悩み	『棲神』第二十三号	昭和十二(一九三七)年十二月
室住 一妙	純粹宗学の理念とその展開	『棲神』第二十三号	昭和十二(一九三七)年十二月

著者	題名	所収	刊行年月日
室住 一妙	即身成仏研究序説	『棲神』第二十四号	昭和十三（一九三八）年十二月
武田 海正	宗学試案の中から 純粹宗学本質論の資料と問題 ―即身成仏研究本論 第一篇 問題学的究明その一―	『棲神』第二十五号	昭和十五（一九四〇）年二月
室住 一妙	宗学の不変性と可変性	『清水龍山先生古稀記念 論文集』（清水龍山先生 教育五十年古稀記念会）	昭和十五（一九四〇）年十二月
馬田 行啓	宗学私観 ―吾等は如何に宗学すべきか― 新体制下における本質宗学よ りの提題	『清水龍山先生古稀記念 論文集』（清水龍山先生 教育五十年古稀記念会）	昭和十五（一九四〇）年十二月
安永 弁哲	宗学断想―日蓮宗に於ける最 近の問題に關聯して― 大信の発動―本質宗学に於け る主体性の規範― 宗学とは何ぞ ―絶対自覚の学として―	『棲神』第二十六号 『立正大学論叢』創刊号	昭和十六（一九四一）年十一月
室住 一妙	『棲神』第二十七号	『棲神』第二十七号	昭和十七（一九四二）年三月
茂田井教亨	『棲神』第二十八号	『棲神』第二十八号	昭和十八（一九四三）年六月

著者	題名	所収	刊行年月日
塩田 義遜	『日蓮宗宗学概論』 (平楽寺書店)		昭和十八(一九四三)年十一月
茂田井教亨	体験から思索へ	『法華』第三十一卷十一・ 十二号	昭和十九(一九四四)年十二月
浅井 要麟	『日蓮聖人教学の研究』(平楽 寺書店)		昭和二十(一九四五)年十二月
吉村孝一郎	祖書学と宗学	『法華』第三十五卷一号	昭和二十三(一九四八)年六月
室住 一妙	宗学をつらぬくもの	『法華』第三十五卷三号	昭和二十四(一九四九)年二月
執行 海秀	宗教の領域と宗学の課題	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四(一九四九)年三月
綱脇 龍妙	日蓮宗学の現代的徹底単純化 と人間礼拝	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四(一九四九)年三月
戸田 浩暁	儒家の非仏教論―宗学の自己 反省のために―	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四(一九四九)年三月
中野 文隆	新時代の法門綱格―教相主義 より観心主義への論証―	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四(一九四九)年三月
長谷川正徳	現代宗学の課題 ―方法に就いての一私見―	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四(一九四九)年三月

著者	題名	所収	刊行年月日
茂田井教享	宗学私見	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四（一九四九）年三月
安永 弁哲	日蓮宗学の主体性	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四（一九四九）年三月
渡邊 日宣	宗学の組織について	『日蓮宗教学研究大会紀要』 第一集	昭和二十四（一九四九）年三月
茂田井教享	座談会補遺	『法華』第三十六卷一号	昭和二十四（一九四九）年十月
望月 歆厚 ほか	座談宗学の現代的課題	『法華』第三十六卷一号	昭和二十四（一九四九）年十月
鴨宮 英迅	根本宗学上より唱題往成論を 提唱す	『大崎学報』第九十七号	昭和二十五（一九五〇）年六月
齋藤 龍遵	一代五時の徹底と「いのり」 の宗学	『大崎学報』第九十七号	昭和二十五（一九五〇）年六月
竹田 日濶	永遠の過去より久遠の未来に 到る迄永久の現代として必要 なる当家の基本宗学	『大崎学報』第九十七号	昭和二十五（一九五〇）年六月
長谷川正徳	現代における教学の問題	『大崎学報』第九十八号	昭和二十六（一九五一）年七月
室住 一妙	現代宗学の基本問題	『大崎学報』第九十八号	昭和二十六（一九五一）年七月

著者	題名	所収	刊行年月日
米田 淳雄	宗学の根本的立場	『望月歿厚先生古稀記念論文集』（望月歿厚先生古稀記念会）	昭和二十六（一九五二）年十一月
鈴木 一成	御遺文の研究を提唱す	『宗研』創刊号	昭和二十七（一九五二）年十二月
渡辺 和範	宗学に望まれるもの	『宗研』創刊号	昭和二十七（一九五二）年十二月
望月 歿厚	宗学人に寄す	『宗研』第三号 （『大崎学報』第一二三号所収）	昭和二十八（一九五三）年六月
芹澤 寛哉	教義と教学	『棲神』第二十九号	昭和二十八（一九五三）年九月
室住 一妙	給仕第一の精神	『棲神』第二十九号	昭和二十八（一九五二）年九月
室住 一妙	純粹宗学の綱領的展開	『棲神』第二十九号	昭和二十八（一九五三）年九月
茂田井教亨	宗学觀に於ける個的立場と種的立場	『棲神』第二十九号	昭和二十八（一九五三）年九月
大嶋 忠雄	日蓮（真正）仏教学の本質と課題について	『大崎学報』第一〇一号	昭和二十九（一九五四）年七月
室住 一妙	純粹宗学における主体性	『大崎学報』第一〇一号	昭和二十九（一九五四）年七月
有光 友逸	実践宗学としての如来行	『大崎学報』第一〇三号	昭和三十（一九五五）年六月

著者	題名	所収	刊行年月日
室住 一妙	宗祖の主体性を究明するにつ いての方法論的考察 ―伝記の扱い方―	『大崎学報』第一〇三号	昭和三十（一九五五）年六月
森川 博祐	進歩宗学とは何ぞや われらなにをなすべきか ―現代と対決するものとして 問題学的に考える―	『大崎学報』第一〇三号	昭和三十（一九五五）年六月
室住 一妙	宗学上における叡智性の問題 建設のための吟味―純粹宗学 における問題学的領域―	『大崎学報』第一〇五号	昭和三十一（一九五六）年九月
室住 一妙	体系といふこと	『棲神』第三十二号	昭和三十三年（一九五八）年三月
室住 一妙	宗学における体系の問題	『棲神』第三十二号	昭和三十三年（一九五八）年三月
望月 歆厚	『日蓮教学の研究』の序	望月歆厚著『日蓮教学の 研究』（平楽寺書店）	昭和三十三年（一九五八）年十一月
室住 一妙	体系の展開	『棲神』第三十三号	昭和三十四（一九五九）年十二月
大嶋 忠雄	日蓮仏教の本質とその現形象態	『立正教報』No.6	昭和三十五年（一九六〇）年六月
室住 一妙	自己批判の問題点 ―純粹宗学の問題学的素描―	『大崎学報』第一一二号	昭和三十五年（一九六〇）年十二月
室住 一妙	体系的対決	『棲神』第三十四号	昭和三十六（一九六一）年三月

著者	題名	所収	刊行年月日
茂田井教亨	『観心本尊抄研究序説』の自序	茂田井教亨著 『観心本尊抄研究序説』 (山喜房佛書林)	昭和三十九(一九六四)年一月
茂田井教亨	宗学の客観性 ― 跋にかえて ―	茂田井教亨著 『観心本尊抄研究序説』 (山喜房佛書林)	昭和三十九(一九六四)年一月
望月 歙厚	『観心本尊抄研究序説』の序	茂田井教亨著 『観心本尊抄研究序説』 (山喜房佛書林)	昭和三十九(一九六四)年一月
上原 専祿	日蓮遺文をどう読むか	『日本古典文学大系八十二』 (岩波書店)	昭和三十九(一九六四)年四月
真野 正順	『仏教における宗観念の成立』 (理想社)	『大崎学報』第一二二号	昭和三十九(一九六四)年十二月
芹沢 寛哉	宗学の論理と表現	『大崎学報』第一二二号	昭和四十二(一九六七)年七月
茂田井教亨	― 故望月歙厚先生追悼にかえて ― 『望月宗学』の後に来るもの	『所報』No.2 (日蓮宗現代宗教研究所)	昭和四十三(一九六八)年三月
茂田井教亨	第二節 本尊論の展開 ― 田中智学と本多日生との比較 ―	『近代日本の法華仏教』 (平楽寺書店)	昭和四十三(一九六八)年三月
執行 海秀	望月先生の宗学	『大崎学報』第一二三号	昭和四十三(一九六八)年六月

著者	題名	所収	刊行年月日
勝呂 信静	思い出すままに	『大崎学報』第一二三号	昭和四十三（一九六八）年六月
日比 宣正	遺徳を偲んで	『大崎学報』第一二三号	昭和四十三（一九六八）年六月
室住 一妙	宗学論について	『大崎学報』第一二三号	昭和四十三（一九六八）年六月
茂田井教亨	最後の課題	『大崎学報』第一二三号	昭和四十三（一九六八）年六月
望月 歆厚	宗学各論	『大崎学報』第一二三号	昭和四十三（一九六八）年六月
渡辺 宝陽	望月先生を偲ぶ	『大崎学報』第一二三号	昭和四十三（一九六八）年六月
室住 一妙	宗学論私議 —創造宗学への理解—	『棲神』第四十一号	昭和四十三（一九六八）年十一月
望月 歆厚	『日蓮宗学説史』の緒論	望月歆厚著『日蓮宗学説史』（平楽寺書店）	昭和四十三（一九六八）年十一月
茂田井教亨	「宗義大綱」に対する疑義に 答う—特に竹田日濶師の質疑 に対して—	『所報』No.3 (日蓮宗現代宗教研究所)	昭和四十四（一九六九）年三月
渡辺 宝陽	宗学論 —宗学論の回顧と展望—	『所報』No.3 (日蓮宗現代宗教研究所)	昭和四十四（一九六九）年三月
上原 専祿	日蓮認識の諸問題	『日本の思想』第四卷別冊	昭和四十四（一九六九）年十一月
室住 一妙	随想 宗宣言おぼえがき	『棲神』第四十二号	昭和四十五（一九七〇）年三月
上田 本昌	松木本興先生の教化と近代宗学	『棲神』第四十二号	昭和四十五（一九七〇）年三月

著者	題名	所収	刊行年月日
室住 一妙	純粹宗学と現代	『所報』No.4 (日蓮宗現代宗教研究所)	昭和四十五(一九七〇)年三月
室住 一妙	宗宣言と教団	『棲神』第四十三号	昭和四十六(一九七二)年二月
茂田井教亨	宗学的思考について	『仏教学論集』第八号	昭和四十六(一九七二)年十二月
勝呂 信静	宗学研究上の二三の問題点	茂田井教亨先生古稀記念 論文集『日蓮教学の諸問 題』(平楽寺書店)	昭和四十九(一九七四)年十二月
室住 一妙	現代を活かす宗学について	『現代宗教研究』第九号 (日蓮宗現代宗教研究所)	昭和五十(一九七五)年三月
茂田井教亨	付属有在	『日蓮教学研究所紀要』 第二号	昭和五十(一九七五)年三月
上原 専祿	本を読む・切手を読む	『クレタの壺―世界史像形 成への試読―』(評論社)	昭和五十(一九七五)年四月
疋田 英肇	純粹宗学への道	『棲神』第四十八号	昭和五十(一九七五)年十月
茂田井教亨	宗学とは何か	『棲神』第四十八号	昭和五十(一九七五)年十月
茂田井教亨	『日蓮宗信行論の研究』の序	渡辺宝陽著『日蓮宗信行 論の研究』(平楽寺書店)	昭和五十一(一九七六)年一月
茂田井教亨	『開目抄講讃』の序	茂田井教亨述『開目抄講 讃』(山喜房佛書林)	昭和五十二(一九七七)年十二月

著者	題名	所収	刊行年月日
茂田井教亨	宗学研鑽上の課題	『大崎学報』第一三二号	昭和五十三年（一九七八）年九月
茂田井教亨	宗学断想	『御遺文研究』第九号	昭和五十四年（一九七九）年一月
安永 弁哲	現代宗学への自己批判	『棲神』第五十二号	昭和五十五年（一九八〇）年三月
渡辺 宝陽	日蓮宗学	『現代仏教を知る大事典』（金花舎）	昭和五十五年（一九八〇）年七月
茂田井教亨	宗学的思考と認識	茂田井教亨著『日蓮教学の根本問題』（平楽寺書店）	昭和五十六年（一九八一）年一月
茂田井教亨	『日蓮教学の根本問題』のあとがき	茂田井教亨著『日蓮教学の根本問題』（平楽寺書店）	昭和五十六年（一九八一）年一月
北川 前肇	巻頭言（問いの宗学）	『御遺文研究』第十二号	昭和五十七年（一九八二年）一月
茂田井教亨	『日蓮聖人教学研究』の序	庵谷行亨著『日蓮聖人教学研究』（山喜房佛書林）	昭和五十九年（一九八四年）二月
庵谷 行亨	宗学研究について	中村瑞隆博士古稀記念論集『仏教学論集』（春秋社）	昭和六十一年（一九八五年）二月
上田 本昌	解説第二部（室住一妙著『純粹宗学を求めて』）	室住一妙著『純粹宗学を求めて』（山喜房佛書林）	昭和六十二年（一九八七年）三月
高木 豊	解説第一部（室住一妙著『純粹宗学を求めて』）	室住一妙著『純粹宗学を求めて』（山喜房佛書林）	昭和六十二年（一九八七年）三月

著者	題名	所収	刊行年月日
室住 一妙	『純粹宗学を求めて』 (山喜房佛書林)		昭和六十二(一九八七)年三月
茂田井教亨	『純粹宗学を求めて』の序	室住一妙著『純粹宗学を求めて』(山喜房佛書林)	昭和六十二(一九八七)年三月
渡辺 宝陽	解説 第三部(室住一妙著『純粹宗学を求めて』)	室住一妙著『純粹宗学を求めて』(山喜房佛書林)	昭和六十二(一九八七)年三月
庵谷 行亨	日蓮教学の本質と課題	庵谷行亨著『日蓮聖人教学の基礎』一 (山喜房佛書林)	平成元(一九八九)年九月
石川 教張	日蓮宗教化学の研究を	『現代宗教研究』第二十四号	平成二(一九九〇)年三月
北川 前肇	『教学の学び方』(本門法華宗学院)		平成四(一九九二)年三月
河村 孝照	宗学研究の方法論について	『日蓮教学研究所紀要』第三十号	平成十五(二〇〇三)年三月
間宮 啓壬	宗学的日蓮研究 ―近代以降の点描を中心に―	『東洋文化研究所所報』第十号	平成十八(二〇〇六)年四月
古河 良啓	宗学について ※拙稿	『現代宗教研究』第四十九号	平成二十七(二〇一五)年三月
武田 悟一	日蓮宗における宗学の解釈とその方法論	『日本仏教を問う 宗学のこれから』(春秋社)	平成三十(二〇一八)年九月
渡辺 宝陽	近代日蓮教学の回顧と展望	『日蓮学』第二号	平成三十(二〇一八)年十月

著者	題名	所収	刊行年月日
古河 良啓	望月歆厚氏の「宗学論」の一考察 ※拙稿	庵谷行亭先生古希記念論集『日蓮教学とその展開』（山喜房佛書林）	平成三十一（二〇一九）年三月

右記の表は、近代における「宗学」について述べられている主な論著を挙げた。

- 1 『日本国語大辞典（第二版）』第六卷（小学館、二〇〇一年）一二〇九頁
- 2 『広説佛教語大辞典』中卷（東京書籍株式会社、二〇〇一年）七五九頁
- 3 『現代仏教を知る大事典』（金花舎、一九八〇年）
- 4 『日本仏教を問う 宗学のこれから』（春秋社、二〇一八年）
- 5 前掲の二書は約四十年の開きがあるが、日本仏教における宗学を次のように評している。

『現代仏教を知る大事典』（「総論—宗学の周辺—」、五二—頁）

その結果、執筆された論文はいずれも力作であるが、相互に、宗学というものの内容、定義、アプローチの姿勢、方法論などに大きな差を示している。（中略）しかし、同じく「宗学」の回顧と展望をあつかいながらも、一つの宗学と他の宗学がまったくかみあわない形で提示されたという現象は、宗学という領域の広さを示すと同時に、宗学の定義ないし方法論が日本の仏教界においていまだコンセンサスが得られていないという事実を示しているといえよう。

『日本仏教を問う』（「編集後記」、二八五頁—二八六頁）

天台宗・真言宗・浄土宗は、「宗学」を概して宗派で伝統的に学ばれてきた学問とし、現在の大正大学でも履修する科目と定めている。しかし日蓮宗では「宗学」を個々が祖師をたずねる学問的な営みとみなし、立正大学では日蓮系教団全体の教理学として「教学」を学ぶ。また浄土真宗大谷派は「宗学」を過去の学問と位置づけ、近代以降に提唱された人格の

陶冶をもつばら「真宗学」と呼び、それが現在も大谷大学で学ばれている。このように、「宗学」の定義は一樣ではない。

6 『日蓮宗事典刊行委員会』『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院、一九八一年）一七七頁

7 優陀那院日輝を始め、浅井要麟氏、望月欲厚氏、室住一妙氏、茂田井教亨氏の各氏の宗学についての見解が列記されている。

8 日蓮宗の宗学論における代表的な先行研究としては、渡辺宝陽氏の「宗学論―宗学論の回顧と展望―」（日蓮宗現代宗教研究所編『所報』No.3、日蓮宗宗務院、一九六九年）と、庵谷行亨氏の「宗学研究について」（中村瑞隆博士古稀記念論集『仏教学論集』、春秋社、一九八五年）が挙げられる。

9 先行研究に示唆を受け、諸先師の宗学に関する著述の整理を試み、各師の宗学論を概観してきた。拙稿「宗学について」（『現代宗教研究』第四十九号、日蓮宗宗務院、二〇一五年）、「望月欲厚氏の「宗学論」の一考察」（庵谷行亨先生古希記念論集『日蓮教学とその展開』山喜房佛書林、二〇一九年）を参照いただきたい。なお、「望月欲厚氏の「宗学論」の一考察」の論攷の中では近代における宗学論を一覧として掲載したが、この度新たにいくつかの宗学論を追記し、【別表】としてあらためて本稿末尾に附した。

10 令和二年は新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった。

11 『日蓮宗事典』八四一頁

12 『日蓮宗教学研究大会紀要』第一集（日蓮宗教学研究会、一九四九年）

13 教学研究大会の紀要（記録）について管見乍らまとめると次の通りである。

① 教学研究大会の紀要は、独立した冊子として刊行されたものは第一回大会のみである。

② 第二回大会は復刊した『大崎学報』第九十七号に掲載され、以降の大会の記録は『大崎学報』と『棲神』に掲載されることとなる。

③ 『大崎学報』第一三一号には、第一回から第三十回までの発表論題一覧が掲載されている。

④ 発表要旨を含め、大会の記録自体が両誌に掲載されていない回がいくつか見受けられる。

⑤『日蓮教学研究紀要』（創刊号から第四十七号）の各号の彙報には、第二十六回大会から第七十二回大会までの発表者及び論題が掲載されている。

⑥『大崎学報』一三一号や『日蓮教学研究紀要』に掲載される発表論題を通覧すると、発表要旨は活字化されていないが、その論題から宗学論と推察される発表が散見される。集約して「教学大会における宗学論の発表」として一覽表への整理を試みたが本稿には掲載できなかった。今後の課題としたい。

14 『紀要』一頁

15 「知性の貧困から来る批判の欠乏」（『紀要』二二頁）

経王、本懐等の思想を無批判に受継いで知性による再批判を忘れて遂に教権的な叱咤に始終するきらいはないか。（中略）

信仰は純真な紹継をその面目とはするが、同時に教学の合理性即ち自らの知性の精練を経た知目によって批判せられなければ、盲目跋行にして信仰と修行の歩を運ぶ場合自らを誤るのみならず、他をして過を犯さしめるものであらうと考えられる。

16 「信仰上に反省の謙虚さを失った」（『紀要』三三頁）

宗門の信仰が非常に強烈である点は之を認めるが、強烈であることは時に固定し形式化する危険を多分に包蔵する。否宗門の信仰は既にこのような危険に曝されていると思う。これは強大な信仰が柔軟性を欠いて内省に欠如するところがあるからである。信仰は本質的に謙虚でなければならぬ。（中略）謙虚な点に欠けた点が内省とか反省とかの余裕を与えないところに本宗信仰の化石化を早めたのではあるまいか。

17 『紀要』九十五頁

18 第二回教学大会（昭和二十四年）では「現代思想に対し宗学は如何に在るべきか」と題した討論会が行われている（『大崎学報』第九十七号、二〇二頁）。第一回大会に続き宗学をテーマとした討論会ということの内容が気になるが、残念ながら活字化されていない。また、第二十二回教学大会（昭和四十四年）では、「特別発表 近代宗学の回顧と展望」として、渡辺宝陽「執行海秀先生の学風と業績」、上田本昌「松木本興先生の教化と近代宗学」、茂田井教亨「望月宗学管見」、宮崎英修「所謂「祖書学」と鈴木先生の發揮」の諸氏により宗学についての特別発表が行われている。上田本昌氏の発表のみ

『棲神』第四十二号に活字化されている。

19 渡辺宝陽「宗学論—宗学論の回顧と展望—」二十四頁〜二十五頁

20 第一回教学大会当時の様子を知る資料として、昭和五十二年十月十日付けの日蓮宗新聞に掲載された「第30回迎えた日蓮宗教学研究発表大会」という記事がある。この座談会は、宮崎英修氏、野村耀昌氏、中村瑞隆氏、浅井圓道氏、渡辺宝陽氏に参加し、教学大会三十年の歩みをふり返っている。第一回教学大会に関連した発言を一部抜粋すると次の通りである。

宮崎 「終戦後の劣悪な出版事情の中で、昭和二十三年に『大崎学報』（立正大学仏教学会機関誌）を復刊することになった。その時に望月歓厚先生（故人＝仏教学部長）が、宗学の振興をうながすために、日蓮宗の教学研究発表大会の開催を提唱されたのが、たしか一番最初でしたね」

野村 「思い出すと、終戦になったら、望月先生の目がガラッと変わって『これからやろう』ということで（中略）望月先生を中に結集した」

渡辺 「（前略）私たちが感ずるところでは、戦争に負けちゃって、戦後に宗門もどうなるか分からない。宗門の在り方全体というものが、全部教学大会、教学の研究ということによって、なにか曙光が見えてくるのじゃないかという期待がずいぶんあったような気がするのですけど」

宮崎 「第一回、第二回、第三回ぐらまでの発表者を見ると、若い人を除いて第一級の方々でしたね。こういう人たちが、宗学の復興ということについて、非常に熱意を燃やしていたということは確実ですよ」

21 「知性や思索に依って規範の道を修し、人間の心性に内在する仏性を開発する」（『紀要』二十七頁）

22 「内在神を主張し、人間の中に神を見出し、その神性、即ち仏性を磨くことが仏道である」（『紀要』二十七頁）

23 文末に備考があり、観心の語義は既成教学の解釈にとられず、「今日の知性人が合理的事証主義の科学精神」を基調と

しているから現代的に解釈すること、「時代の要求に応える教相」と「現代僧侶の観心」との関係は、「現代思想を背景とする社会的条件」の下にのみ論議すべきであることが記されている。（『紀要』五十五頁）

24 昭和二十三年当時の茂田井氏は東京立正高等学校男子部の教諭であり、昭和二十五年四月より立正大学仏教学部に宗学助手として奉職することとなる。『日蓮教学の諸問題』（平楽寺書店、一九七四年十二月）略年譜より

25 『紀要』八十九頁

26 ただし安永氏の宗学論は大会中の発表ではなく、『紀要』への誌上参加であるため、望月氏の講評とは時期が前後すると  
思われる。

27 前掲の拙稿

28 「座談 宗学の現代的課題」（『法華』第三十六巻一号、一九四九年）所収

29 ただしこの座談会は、第一回教学大会と直接的な関係はないと思われる。

30 「いつか」が何を指すのか座談会では明示されていないが、前後の文脈から第一回教学大会を指すものと思われる。詳細は前掲の拙稿を参照いただきたい。

31 『紀要』九十頁～九十二頁

32 坂本幸男（日深）氏と思われる。

33 例えば、室住一妙氏は望月欲厚氏の提唱した「創造宗学」に対して、「宗学論について」（『大崎学報』第一二三号、一九六八年）や「宗学論私議―創造宗学への理解」（『棲神』第四十一号、一九六八年）の中で疑問を呈している。しかし室住氏の論致は望月氏の遷化後に寄稿されたものであり、当時両者において宗学論のやり取りがなされたかは定かではない。